
巻頭言

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究14
P.1 (2026)



巻 頭 言

順天堂大学保健看護学部 学部長

兒 玉 裕 三

この度、新たに順天堂保健看護研究第14巻をお届けいたします。

日本の看護は、戦後の混乱期から公衆衛生の向上とともに発展し、医療の高度化・専門分化を背景に、実践のみならず教育・研究の領域を着実に広げてきました。とりわけ看護研究は、経験や慣習に基づく看護から、科学的根拠に裏付けられた看護へと進化するための原動力となり、患者の安全と生活の質の向上に大きく寄与してきた歴史をもちます。

私は保健看護学部長として看護教育・研究に携わると同時に、臨床医として日々医療の現場に立っております。その両方の立場から実感するのは、看護師の専門性と社会的地位をより一層高めていくためには、優れた実践に加え、それを言語化し、検証し、社会に発信する研究活動が不可欠であるということです。看護師自身が研究に主体的に関わることで、看護の価値は可視化され、多職種連携の中においても対等な専門職としての立ち位置が明確になると考えます。

これからの医療において求められるのは、疾患の治療にとどまらず、患者一人ひとりの人生や価値観に寄り添う医療です。その中心的な担い手となるのが看護職であり、その役割は今後さらに重要性を増していきます。だからこそ、看護職者には個別の事例を深く理解する力と同時に、それを社会全体の課題として捉える広い研究者的視野が求められます。研究とは決して

特別な人だけのものではなく、日々の看護実践から生まれる素朴な疑問を大切にし、探究し続ける姿勢そのものです。臨床の忙しさの中で感じる小さな「なぜ」や「もっと良くできるのではないか」という問いこそが、看護の質を高め、患者に還元される研究の出発点となります。こうした問いを組織として支え、共有していく文化を育むことも、教育・医療機関に求められる重要な役割です。

看護学生時代の実習で抱いた違和感や関心、心を動かされた場面は、将来にわたる貴重な研究の芽となります。学生の段階から、興味をもったテーマに積極的に関わり、指導者とともに考え、調べ、発信する経験は、臨床に出た後の専門職としての自律性を育み、看護師としての確かな基盤を形成します。

さらに、日本の看護が今後一層発展し、国際的にも評価される専門職となるためには、国内にとどまらず世界を視野に入れることが不可欠です。そして、多様な経験を積んだ看護師一人ひとりが、看護の地位向上を牽引し、日本の医療の未来を切り拓く原動力となることを強く期待します。

本誌が、看護学生から臨床の第一線で活躍する看護師、そして研究者へと成長していく過程を支える知の基盤となり、看護実践と研究をつなぐ架け橋となることを願っております。